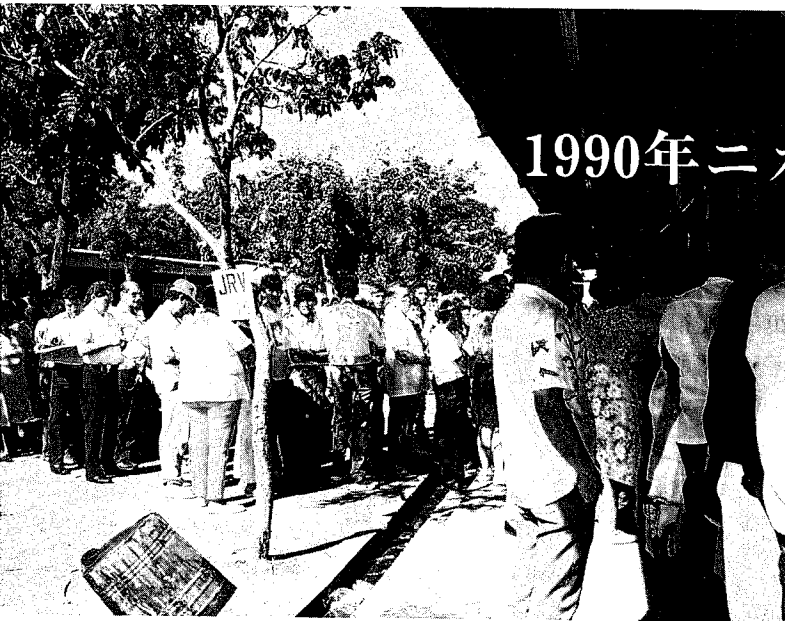


1990年ニカラグア総選挙



田 中 高

// はじめに

2月25日、ニカラグアでかねてから注目されていた総選挙が、平和裡のうちに実施された。大方の予想を裏切って、UNO(野党連合)のビオレッタ・チャモロ女史が、オルテガ大統領に10ポイント以上の差をつけて圧勝した。2カ月後の4月25日には、予定どおりチャモロ新政権が発足した。与党UNO内部の対立が表面化して懸念材料は残るものの、コントラ解体の交渉も順調に進んでおり、中米紛争の核であったニカラグア内戦にも、和平の曙光が鮮明に見えてきた。ちょうど東欧における民主化の動きと歩調を合わせるかのように、武装革命によって成立した社会主義政権が、選挙によって政権の座を降りるといふ、従来例を見なかった政治変動が起きたわけである。

筆者はニカラグア選挙監視団の監視員として、総選挙に立ち会った。そこで本稿では、そのときの体験を交えながら、新政権の今後の動向について探ってみたい。なお、選挙実施までの経過と、中米全体の情勢については、石井章氏の「1989年・中米和平交渉」(本誌、Vol.7 No.1に掲載)に詳しく論じられており、そちらを参考にされたい。

// 名実ともに公正かつ自由な選挙

2月25日に実施された総選挙(正副大統領、国民議会議員、地方議会議員)には、国連をはじめ、米州機構、欧州議会、カーター委員会、イギリス政府、米国ラテンアメリカ学会、そのほか幾つかのNGOが参加した。おそらくこれだけの国際監視団を受け入れた選挙はこれまでになかったのではないだろうか。国連に限ってみても、独立国の選挙に監視団を派遣するのは、今回が初めてであった。そこでまず、国連監視団の仕事の内容を簡単に紹介することにした。

ONUVEN(国連ニカラグア選挙監視団)は、国連事務総長の権限によって1989年8月に正式に発足した。予算は国連の通常予算のなかから支出されている。次の6項目がOUVENNの主たる任務である。(1)各政党が最高選挙審議会に公平に参加しているかの検証。(2)各政党が妨害・脅迫のない組織・動員を行なえる自由の検証。(3)国営テレビ・ラジオでの放送時間の長さ・タイミングの点で、各政党の平等なアクセスが確保されているかの検証。(4)選挙人名簿の適正な作成の検証。(5)最高選挙審議会への選挙プロセスにおける苦情、異議の通報。(6)最高選挙審議会への選挙プロセスにおける苦情、異議の通報。(7)国連事務総長に対しての選挙検証結果とコメン

トを含む報告書の提出。

選挙監視団の派遣期間は次の3段階となっている。第1段階：1989年8月21日～12月3日。約20名の監視団が全ての選挙区および自治体を視察。要員は事務局職員と選挙専門家で構成。第2段階：12月4日～1990年2月20日。約20名の監視団が追加派遣され、国内大部分の選挙区と投票所を視察。要員は国連事務局と各国政府の職員。第3段階：12月21日～27日。約120人の監視員が追加投入され、25日の投票を監視。要員は国連事務局職員、各国政府を通じて採用された監視員となっている。

筆者を含めた日本政府派遣の6名の監視員は、選挙監視活動のクライマックスである、第3段階に立ち会ったわけである。言うまでもなく、監視活動の重要度という点では、第1・第2段階も大切である。特に選挙人名簿の作成や、適正なメディア利用の検証などは、選挙の有効性そのものに影響する。ONUVENは選挙前に、3回にわたって中間報告書を提出している。いずれも大部のもので、詳細にわたって調査されている。たとえば、全ての選挙関連のテレビ・ラジオ放送を録画録音して、野党に不利がなかったかどうか分析している。筆者の場合、首都マナグアから北西200kmにあるエステリ県の投票所を監視することになった。この地域はかつて、サンディーノ将軍による反米闘争が繰り広げられた場所でもあり、革命政府支持が強いと見られた。投票結果を見ると、カリブ海側の選挙区と並んで、サンディニスタ政権が勝利した数少ない選挙区だったが、その差は予想外に小さかった(第1表参照)。現地での感触でも、ポスターや落書など、表面的には革命政権支持が優勢であった。ところが町の人たちに話しかけると、案外野党連合(UNO)支持も多く、意外な感じがした。スペイン語でUNOは1の意味だが、「どの党が勝ちそうですか」と水を向けると、人差し指1本で返事がきたりした。

各監視員は、平均50カ所ぐらいの投票所を巡回する。筆者の場合、ハラパというホンジュラス国



境の町も入っていたため、移動が大変であった。投票前日にエステリを出発し、ハラパで一泊した。前日からアルコール類の販売は禁止された。この周辺はコントラとの戦闘が最も激しかった地域で、至る所に銃弾の痕があった。選挙はやはりビッグ・イベントだったようで、村中に緊張感がみなぎっているのが肌で感じられた。翌朝7時には、ニカラグア全土4300カ所あまりの投票所で投票が開始された。投票所の多くは、小学校や公民館で、革命後に建てられたものも多かった。サンディニスタ政権が教育に力を入れていたのは事実である。最高選挙管理委員会(CSE)の準備は周到で、コンピュータ処理された、16歳以上の男女の投票者名簿が用意されていた。この国の危機的な経済情勢を考えると、例外的な手際よさと言ってよい。

監視員の仕事は大別して二つである。一つは、投票所の見回り。具体的には、野党の立ち会い人がいるか、投票の秘密が守られているか、投票所の周辺でポスター掲示や選挙運動がされていないか、などである。巡回した50カ所近くの投票所では、この点は完璧に近いまでに守られていた。もう一つの仕事は、開票に立ち会うことであった。国連では独自のサンプル調査を行ない、CSEの結果と突き合わせるようになっていた。即日開票だったので、夜半過ぎまでのハードなスケジュールとなった。立ち会う場所はONUVENが指定する。筆者の場合トガルパという片田舎の小学校であった。

教室を利用した投票所で、薄暗い裸電球一つのもので始められた開票作業の情景は、今でも鮮明に思い出すことができる。周囲には異様な熱気と緊張感が充満していた。正副大統領、国会議員、地方議会議員の投票箱がそれぞれ開票されていく



が、その場に立ち会った各党の代表は、感情を押し殺して無表情であった。不正行為の余地はまずなかった。この点は、監視員ほぼ全員が一致している。困難な条件のもとで、整然と秩序正しく選挙を実行した、ニカラグア人の民度の高さと国民性を知る、よい経験となった。

26日の未明には、大勢が判明しておりUNOの勝利が報じられていた。26日付のサンディニスタ党の機関紙『バリカーダ』の1面トップの見出しは、何とも苦渋に満ちており、「30.2%の開票。微妙な投票」。翌27日の1面トップは「サンディーノ主義は民主主義を強化」となっている。革命政権が全くといってよいくらい、敗北を予想していなかった点は特筆されてよい。マナグアで発行されている月刊誌『ペンサミエント・プロピオ』3月号で、サンディニスタ政権に理解を示してきた、ハビエル・ゴロステシアガは、次のような言葉で論稿を始めている。「なぜ北アメリカの世論調査の専門家たち、国内の研究者やFSLNの世論調査は間違っただのか。なぜONUVENやOEA（米州機構）、カーター・センターの世論調査の専門家たちは、選挙の結果に驚いたのか。なぜ国際監視団の多くが、サンディニスタ政権の圧勝を信じていたのか……」。

筆者は、26日にはエステリアからマナグアに戻った。町の様子はひっそりとしており、選挙後のお祭り騒ぎといったものはなかった。奇妙ともいえる静けさが支配していた。午後になると、偶然が重なって、市内にあるビオレッタ夫人の家のなかにいた。この家は旧住宅街にあり、ボロニヤスやラス・コリーナス、ピア・パナマといった郊外の新興住宅地とは趣を異にしている。ニカラグア滞在中(1985～87年)、何度か訪れたことがあった。当時は彼女が社主を務めていた『ラ・プレッサ』紙が、発行停止処分を受けており、現在とはまるで状況が違った。家の壁には「売国奴」の落書があり、電話線が切られたり、石が投げられるといった嫌がらせが続いていた。

チャモロ家については日本ではほとんど知られていないが、米国のマスコミではしばしば報道されてきた。ビオレッタ夫人の亡夫ペドロ・ホアキン・チャモロはソモサ時代にラ・プレッサ紙で反政府の論陣を張ったことで有名である。1978年に彼が暗殺されたのをきっかけとして、一気に革命の機運が盛り上がった。ラ・プレッサ社を創設したのは、ニカラグアを代表する歴史家で、政治家でもあった、先代のペドロ・ホアキン・チャモロである。その長男が暗殺されたペドロ・ホアキン。先代のペドロ・ホアキンはマルガリータ夫人（現在も健在）との間に5人の子供をもうけた。暗殺された長男ペドロのほかに、革命政権寄りの『ヌエボ・ディアリオ』紙社長のハビエル、ラ・プレッサ社副社長のハイメの2人の兄弟、アニタ、リヒアの姉妹である。先代のペドロ・ホアキンは遺産としてラ・プレッサ社の株式を、5人の子供に均等に配分した。しかしハビエルとリヒアが売却したため、経営権は残りの3人（ビオレッタ、ハイメ、アニタ。マルガリータも所有していると見られるが、すでに80歳を超えており、実際の経営には参加していない）の手にある。筆者の知るかぎり、3人は新政権に深くはコミットしてないようである。

夫人の家は全体がアンティークな雰囲気、中庭には亡夫ペドロ・ホアキンの銅像が立っている。

第1表 ニカラグア総選挙の結果 (上段・大統領選挙 下段・国民議会選挙)

県名	第1管区	第2管区	第3管区	第4管区	第5管区	第6管区	第7管区	第8管区	第9管区	合計	%
	ヌエバセゴビア、エステリ、マドリリス	レオン、チナンデガ	マナグア	マサヤ、グラナダ、カラソ、リバス	ボアコ、チョンタレス	ヒノテガ、マタガルバ	北大西洋自治区	中部大西洋自治区	南部大西洋自治区		
投票者数	150,223	252,314	408,987	270,298	147,867	197,887	47,186	23,334	12,742	1,510,838	100
無効投票	150,038	252,321	409,413	271,520	147,598	197,789	47,248	23,369	12,714	1,512,107	100
	10,549	11,279	17,569	16,267	8,380	16,343	7,241	1,853	813	90,249	6
有効投票	10,728	11,465	17,449	17,509	8,299	16,445	7,646	2,109	1,073	92,723	6
	139,674	241,035	391,418	254,031	139,487	181,544	39,945	21,481	11,929	1,420,544	94
U N O	139,310	240,856	391,964	254,101	139,299	181,344	39,602	21,260	11,641	1,419,384	94
	56,661	126,386	209,527	135,117	97,911	105,020	19,253	13,040	4,637	777,552	55*
F S L N	66,241(4)	125,986(8)	209,125(4)	133,872(8)	97,847(8)	104,707(7)	9,918(1)	12,479(1)	4,573	762,748	(5)
	66,960	105,176	168,071	110,090	35,081	65,499	15,044	7,256	6,709	579,886	41*
	67,035(4)	105,357(7)	166,438(1)	111,036(6)	35,055(2)	65,568(4)	15,136(1)	7,308(1)	6,740(1)	579,723	(3)

(出所) 最高選挙審議会資料。

(注) カッコ内は総数92議席の国民議会議席数。UNO (野党連合), FSLN (サンディニスタ民族解放戦線) の他に8政党が参加。*有効投票数に対する割合。

26日の午後、この家には30~40人くらいのUNO支持者やチャモロ家の関係者がいた。皆気ままに談笑していたが、なんとなく深刻な表情の人が多く、選挙の勝利に沸くという雰囲気ではなかった。実際軍や警察はサンディニスタの統制下にあったから、これをあまり刺激しないようにと、自己抑制していたのかもしれない。そんななか、午後6時過ぎ頃、オルテガ大統領が夫人を祝福するためにやってきた。オルテガの訪問は、1時間くらい前に知らされていたので、玄関から中庭までの通路は開けてあった。やがて玄関の戸が開き一行が入ってきた。カーター元米大統領の姿もあった。カメラマンのフラッシュが稲妻のように辺りを明るくした。2人の新旧大統領が抱擁した。

その時おしゃべりに夢中だった人々の半分が、2人を見るために人垣を作ったのだが、奇妙なことに、残りの半分はそのまま、まるで無視するかのような素振りで、以前と同じように振る舞っていた。オルテガの訪問はニカラグアの歴史が転換する瞬間といってもよい。2人の会見写真は、世界中の新聞で報道された。ところがその場にいた人たちは、拍手も、歓声も、プーイングもすることなく、ただ心配気に黙って見ているか、無視し

ていた。一行はやがて奥の書斎に消えた。印象的だったのは、残されたボディガードの気落ちした、落ち着きのない表情であった。

新政権の課題

4月25日に発足したチャモロ政権の任期は6年間で、1996年までである。任期を無事に全うできるか否かは、一に与党UNOの内部結束にかかっている。だがUNOは選挙のために急ごしらえした、極右から極左を含んだ寄り合い所帯である。反サンディニスタという点が唯一の共通因子である。選挙戦の最中からUNOの内部対立は表面化していた。ゴドイ副大統領を中心とする、国内で政治活動を続けてきたプロの政治家グループとチャモロ大統領の側近で、娘婿であるラカヨ大統領府大臣や、セサル顧問などのグループの対立である。

注目された国防大臣は、大統領が兼務することになった。ウンベルト・オルテガ前国防相が参謀総長として残ったため、UNO内部に対立が起こっている。今後チャモロ夫人がこうした問題をどのように処理していくのか、その政治力が試されるだろう。また議会でも、憲法改正に必要な3分の

2議席は確保していないので、難航が予想される。筆者の憶測では、UNOが現在の姿のままで6年間の任期を全うする可能性は、少ないと思う。ちょうどサンディニスタ政権から、中間派、穏健派が離反したように、脱退する党が出てくるだろう。このような脆弱な体質を持つものの、新大統領の強みは、西側諸国の全面的な支援を受けていることである。特に米国は、チャモロ政権存続のためには、かなり思い切った策を使うであろう。UNOが勝利した理由は、徴兵制の撤廃と西側の経済援助を約束したからだと言われている。この二つの公約の実施自体は困難ではなかろう。コントラの解体についても、外部条件はすでに揃っている。UNO内部の権力闘争が最大の障害である。

ところでサンディニスタ党は、今後政治活動に専念し、6年後の政権奪回を目指すとしている。実際今回の選挙では、40%の得票率があり、単一の政党としては最大であることに間違いはない。1987年のエスキプラスII合意以後のサンディニスタ政権の動きをみても、政党としての統率力、約束の履行などでは、他の政党を凌駕している。選挙後の権力の移行でも、小競り合いはあったものの、平和裡に治めている。この点は賞讃されてもよいのではないか。クーデターや権力闘争に明け暮れた歴史を持つラテンアメリカの政党のなかでも、サンディニスタ党は、優れた柔軟性と統率力を持つ政治集団である。

だが、サンディニスタに対する支持は今後減少するであろう。ニカラグア人の国民性を考えると、いったん権力の座から降りた党に、それまでと同じ支持を与えると考えるのは困難である。しかも党がその支持の中核としてきたサンディニスタ人民解放軍が、政府軍となり、縮小されれば、なおさらである。政治資金も格段に削減されよう。ただし、UNOが分裂し、多党化した場合、サンディニスタが再び政権の座に就く可能性は残っている。

ニカラグアは革命後、不条理とも言える内戦と経済制裁に苦しんできた。肉親同士の殺し合いによって、5万人以上が犠牲となった。荒廃した国

土と破綻した経済が残された。「失われた10年」と呼ぶには、その代償はあまりにも大きい。にもかかわらず筆者は、内戦や経済危機の責任を、米国の介入政策にのみ帰するのは皮相的と考えている。

革命政府が教育や公衆衛生、農地改革、民衆の直接参加、婦人の地位向上などの分野で、力を注いだのは事実である。だが、経済民主化の柱であった農地改革では、国营農場と官製協同組合づくりを急いだため、農民の強い抵抗にあっている。国营企業の非能率には目にあまるものがあつた。政治面では事実上の一党独裁制が敷かれた。民衆の直接参加も、まずサンディニスタ党を支持することが求められ、権利ではなく「与えられる」ものであつた。党の正統性を傷つけるものに対しては、これを徹底的に弾圧した。革命政府が民主化に動き出すのは、エスキプラスII合意以降である。革命政府の過ちについては、レーガン政権時代の過度の敵視政策に対する批判のなかで、かき消されがちであつた。米国でも日本でも、革命政権の無誤謬性が与件としてあり、直面する困難は、すべて米国という外生要因によって説明する論調が主流であつた。今後は、感情移入や先入観のより少ない研究が望まれよう。

最後に、日本の経済強力について触れておきたい。昨今ODAに対する批判が強い。だがニカラグアのように戦禍で荒廃した国には、やはり不可欠と思われる。社会・環境面での配慮をしたうえで、緊急かつ大規模な援助をする必要があるだろう。チャモロ大統領自身も、日本に対する期待を表明している。米国への過度の依存は避けたいという意向もあろう。新政権は、政府軍の縮小を目指すと発表している。大統領自身は、非武装・中立を目指すと言ったと伝えられている。「平和国家」日本は、この動きを支援する責務を持つと思う。7万人に膨れ上がった政府軍兵士と1万人のコントラに職を与えるだけでも大変な仕事であろう。したがって、雇用を創出するような日本の経済援助は、重要な役割を担うと思う。

(たなか・たかし／四日市大学講師)